

平成19年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 スケトウダラ

学名 *Theragra chalcogramma*

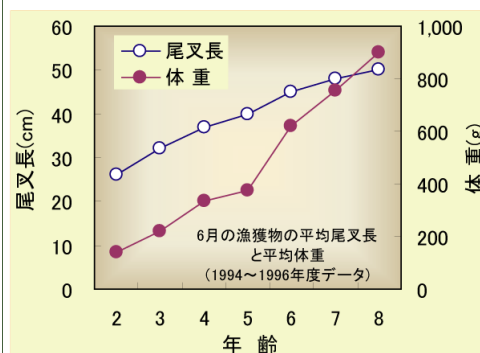
系群名 オホーツク海南部

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 10歳以上
成熟開始年齢: 4歳
産卵期・産卵場: 3～5月、北見大和堆～宗谷地方沿岸およびテルペニア(多来加)湾周辺
索餌期・索餌場: 初夏～秋季、オホーツク海
食性: オキアミ類、カラス類、クラゲノミ類、ヨコエビ類をはじめとする小型甲殻類、その他イカ類、魚類など、本海域では周年魚類の割合が高い
捕食者: 不明

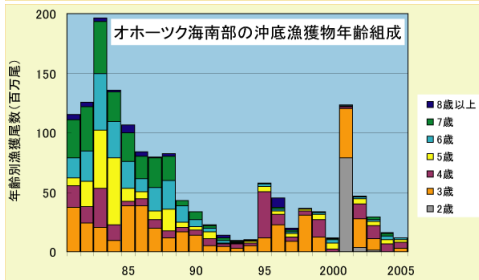
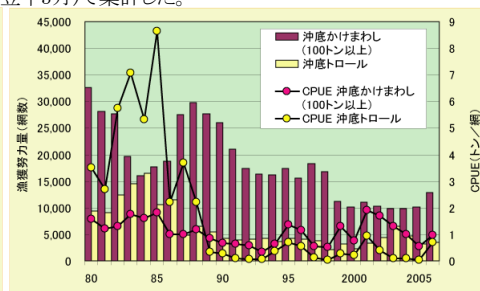
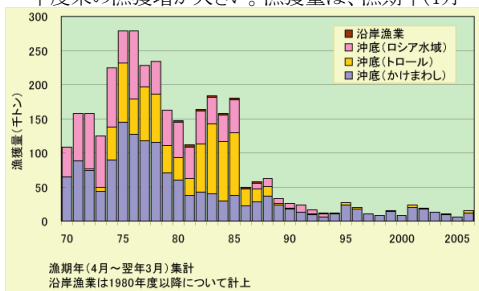


漁業の特徴

本海域で漁獲されるスケトウダラは、ほとんど全てが沖合底びき網(沖底)による。漁期は、流水の接岸期を除くほぼ周年にわたるが、近年では5、6月と12、1月に漁獲量が増加する傾向にある。沖底にはオッタートロール(トロール)とかけまわしがあり、1985年度まではトロールの漁獲が多かったが、それ以降は、漁獲量の大部分はかけまわしのものである。減船により現在の沖底の隻数は、1985年の1/5の16隻となっている。

漁獲の動向

漁獲量は、1980年代前半までは100千トンを超えていたが、ソ連水域での漁獲規制の強化や減船により、1986年には半減した。その後、1989年度頃から漁獲の対象をズワイガニに変えたために、漁獲量は26千トンと大きく落ち込み、以後6千～27千トンの範囲で推移している。2006年度の漁獲量は前年度の6千トンを上回る15千トンであったが、年度末の漁獲増が大きい。漁獲量は、漁期年(4月～翌年3月)で集計した。



資源評価法

日本漁船による漁獲量とCPUEの情報があがるが、本海域に分布するスケトウダラには複数のグループの存在、日ロ両水域に跨った回遊、他系群との混在が推定されており、日本水域でのこれらの情報が資源全体の状態を代表するものとは判断できない。しかし、利用できる資料が他には無いため、ここでは、日本漁船による漁獲量とCPUE、ロシア水域におけるTAC設定値や新規加入の情報などに基づいて、資源状態を推測した。

資源状態

調査船調査の結果、豊度が高いと推測された1999年級群の加入によって、沖底の漁獲量とCPUEは2001年度に上昇したが、その後、2002年度以降の漁獲量とCPUEは減少傾向を示した。本海域における近年のかけまわしのCPUEは、漁獲量の多かった1980年代と同程度の値を示しているが、沖底の有漁漁区数は70%に減少しており、漁場の縮小が示唆されている。1980年度以降の漁獲量の変動範囲と2006年度の漁獲量15千トンから、資源の水準は低いと

判断した。資源の動向は、2002年度以降の漁獲量とCPUEの推移から減少と判断した。しかし、2007年1～7月の漁獲量は大きく増加している。ロシア水域では、2005年級群の豊度が高いとの情報がある。

管理方策

調査結果により、加入前から豊度が高いと推測されていた1999年級群の漁獲状況から、漁獲が資源に対して直接的な影響を与える可能性が示唆されており、漁獲の制御が資源状態の向上に効果をもたらすと考えられる。しかし漁獲量が過去の最大時の1割未満にまで減少し、加入に豊度の高い年級が見られない現状では、早急な資源の回復は難しいと考えられる。そのため、資源状態に応じた漁獲を継続しつつ豊度の高い加入を待ち、豊度の高い年級の加入情報が得られたら、その年級群を保護して資源状態を段階的に改善してゆくことを管理の方策とする。なお、ロシアは、サハリン東岸海域の2007年のTACを15千トンと設定して漁獲規制を実施している。

動向 水準

減少傾向 高位

 中位

 低位

● 本海域のスケウドグラは加入起源や初期成長など生態的に不明な点が多く、また、現在では主分布域がロシア水域に存在することから、入手できる情報が極めて少ない。そのため、これら限定された情報から算定されるABCの精度は低いものとなる。

資源評価のまとめ

● 隣接するロシア水域での漁獲状況が不明で、評価が困難

● 日本水域の状況から、資源は低水準、動向は減少傾向と判断

● 2007年1月以降漁獲量が増加傾向を示す

● ロシア水域では2005年級群が高豊度との情報がある

管理方策のまとめ

● 資源の回復のためには、現在より漁獲水準を引き下げることが必要

● ロシア水域の漁獲状況の情報収集が必要

● ロシアもTACを設定して漁獲規制を実施している（2007年東サハリン海域:15千トン）

資源評価は毎年更新されます。